

# 幼稚園児の教育

## Teaching the Kindergarten Child

洋書紹介 by Hazel M Lambert, 1958

この書物は、幼

稚園の教師たちと

幼児教育を志す学

生たちを対象とし

て書かれ、一九五

八年に発刊された

ものである。

本書の立場は、

著者自身もいつて

いるように、幼稚

園教育の基礎原理

を幼児の発達の特

性に関する科学的

研究の上を求めて

いて、成人や年長

児童とは異なるこ

れらの特性を理解

してこそ、目的お

よび到達水準の設

定も、教育方法や

となるとしているのである。幼児たちの幼稚園における学習はきわめて広義に解すべき性質のものであり、それは幼児たちのもっているあらゆる面における発達上の課題を満足させることである。そして、幼稚園の教師たちは、そのために幼児たちが自由に自己学習のなし得るような場と適当な刺激を提供することに努力せねばならず、その場は幼児たちひとりひとりにふさわしくなければならぬ。各々の幼児たちがどのような発達の段階にあるかということに対して十分な認識を持つようにと、著者は主張し、そのための試みがこの本の随所に挿入されている。保育内容論に入る前に、今日の幼稚園の性格を論じた部分があるが、その中にも「児童発達の立場」と題する一章を設けて児童の発達に教育の基礎をおく立場を説明している。すなわち、成人こそ子どもたちにとって最上の方法を知っていると考える専制的立場と、全くの放任主義との中間に

位するものとして、各々の子どもたちは各

々の発達段階と各々のパーソナリティを持

つ独自の存在であることを信じ、子どもた

ちの成長していく過程の法則と機構を理解

することこそ、子どもたちを指導していく

上に最も必要とされることであるとすると、

児童発達の立場を説明し、成長の原理に触

れている。そして、著者は成長の型がひと

りひとりの子どもに依じて異なったもので

あり、それ故に指導の方法も決して画一で

あり得ないことをくり返しくり返し主張し

ているのである。著者自身の筆によれば、

この本の中に読者たちは「処方」を見出す

ことは出来ないものであり、幼児の指導に関

してたった一つの「最上」というものはあ

り得ないのである。

更に、著者の関心は、アメリカ社会の基

盤たる民主主義と幼児教育との関連に向け

られ、幼稚園の教育原理たる幼児各々の各

発達段階における必要を十分に満たすこと

と、よき民主社会の成員の育成とは、決し

て予じゅんするものではなく、幼児期の発達課題にも、民主社会の責任ある一員としての振舞い方を学習することが含まれている、と説いている。

この本の内容は大別、次の三つの部分から成っている。すなわち「幼稚園の背景・性格に関する部分」「幼稚園における保育内容」「幼稚園のその他の問題」である。次にその各々について、その内容をみていくことにしよう。

#### (1) 幼稚園の背景・性格について

「幼稚園の哲学的背景」と題する最初の章では、幼児教育史の概略が扱われている。プラトニーに始まる幼稚園創設以前の幼児教育、フレイベルの幼稚園、モンテッソーリ、デューイの教育理論と、その歴史をたどって、そして、今日の幼稚園教育の原理を幼児の発達に関する科学的研究の上におき、幼児の現在における興味と欲求を中心とし、抽象的思考よりも活動を主体として、

感覚的な体験や遊びという具体的な経験を通して広範囲の学習をおこなう場が、現代の幼稚園であるとしている。加えて、幼稚園が初等教育に与えた影響についても言及されている。

「今日の就学前教育」という第二章では、先ずアメリカ合衆国における幼稚園教育を説明している。現在のアメリカ合衆国の幼稚園は、その大部分が公立小学校に付設されていて、州による差異はあるが一応4才から6才までの幼児を対象としている。4才児に関しては明確な統計がないが、各州共就学年令が徐々に引き下げられる傾向にあり、5才児に関しては一九五五年の統計では全5才児の四二、九パーセントが幼稚園児であり、その中でも特に都市の白人幼児が高い比率を占めている。第二次大戦における勤労女性の増加は、各州に保育施設を増設させ、これら施設のために州の基金あるいは連邦基金が提供されるようになった。以上のような状態に現在の米国幼稚園

はあるが、農村地域への幼稚園の普及と、障害児児童のための幼稚園の強化は、今後の重要な問題とされている。

更に、この章において、現代の幼稚園の機能は、家庭教育の代行機関であることから更に広がって、幼児の健康と安全に奉仕し、集団生活の機会とさまざまな経験を提供するところであり、アメリカ合衆国において幼稚園教育は常に初等教育の発展のために指導的役割をも果たしてきた、と論じている。そして、初等教育への準備と称して、読み方・書き方・教え方などをカリキュラムの中に置くあり方を批判しているが、このような問題が米国にも存在することを忍ばせて興味深く思われる。著者によれば幼稚園の教育効果は、幼児を成長させ発達させるために最大限の自由と多様な経験を与えることによって、極めて多方向、広範囲に及ぶものであり、どちらかといえば漠然として形に現しにくいものとされているが、多くの研究者たちによって研究されて

いる効果測定を試みも紹介されている。

### 第三章は「児裏発達の立場」と題される。

ここでは、先に触れたように児童の発達に基礎をおく教育的立場を論じ、成長の原理について述べている。すなわち、発達は継続的過程であり、積み重ねられていくものであること、成長の型および段階は各々異なり、平均的な行動あるいは平均的な段階は一つの道標としての意味を持つものであること、彼自身の段階において彼自身の発達の課題を十分に果した子どもがよく発達した子どもなのであって、他の子どもと同じ物差しで発達の程度というものは測定すべきではないこと、などである。

そしてこのような立場に立つ教師は、幼児自身の成長を助け、幼児自身の独立を促進するような指導形態をとるべきであり、そのためには広範囲な経験と探究の可能な学習環境が必要であって、この環境は単に知的発達あるいは身体的発達のためのものではなく、幼児のあらゆる面の必要に応える

ものでなければならぬとして、学習環境が論じられている。

次の章は「幼稚園年令の幼児」について、その身体的特性、社会的成熟度、左利きの問題、知的発達、成熟と学習の問題、幼稚園児の思考、興味、時間に関する観念、言語発達、個人差、などが説かれているが、これらが単に発達心理学の所産の列挙というのではなく、きわめて実際の・具体的な幼児教育の立場から捉えたものとして、またそのような表現で述べられている点、興味深く読まれる。

「幼稚園の教師」を論じたのが第五章である。幼稚園は幼児自身の学習の場ではあるが、やはりその環境の中において幼児たちの必要を充たし、彼らの情緒的な安定をはかる存在として教師のパーソナリティはきわめて重要な意味を持っている。よい教師の性格として著者は、サイモンズ、バーンハムらの挙げた性格特性および、ウイテイの研究による生徒に評価させたよい教師の

条件を掲げている。そして教師に望ましいものとして、ユーモアの感覚、身体的・情緒的な活力などを説明し、更に中流階級の出である教師たちの価値基準・振舞い方が幼児たちにきわめて大きい影響を与えていることを論じている。

第六章は「幼稚園の一日」と題されている。幼稚園の一日は時計仕掛けで展開されるものではないが、ある種の枠組みは必要であって、そのスケジュールによって幼児たちはいちいち成人の手を必要とせず、自律的に行動し得るのである。例えば「手を洗えば、その後で食事になる」ということが幼児たちにわかっていれば、幼児たちの行動は自主的にスムーズになるわけである。

毎日のプログラムの作製はきわめて多くの要因に規定されるものであり、あらゆる幼稚園あるいはあらゆる幼児たちに適用され得るようなものを作ることは不可能であろう。著者はここでも、幼稚園教育には「唯一最上の方法」はあり得ないとくり返して

いる。それ故に、スケジュールあるいはプログラムは各々の教師たちによって、各々の園の各々の幼児たちに適して計画されるべきものとしているが、そのいずれにも含まれる共通の経験を幾つか挙げて説明している。すなわち、自由遊びの時間はどの幼稚園のプログラムにも含まれる。そしてこれは、教師によっては「仕事」と「遊び」の部分から成ると考えられているものであつて、その中には子どもたちが計画しておこなう仕事、きわめて重要な部分として含まれる。そしてこれらの活動は幼児自身の興味を中心として展開されるものであつて成人によって指示される部分をなるべく少なくすべきである。自由遊びの後には片付けの時間が設けられ、子どもたちは自分たちの行為に責任を持つことを学ぶ。更には子どもたちは長ずるにしがたつて自分自身の成し遂げたことを評価しようとする傾向を持つので、仕事の間に挿入したり、あるいは特に時間を設けたりして、自分たちの活

動を報告し評価する時を持つ必要がある。この時間を特に著者は「評価の時間」として扱っているが、興味深く思われる。次いで幼稚園の生活には休息の時を上手に組み入れることが必要であり、更に、プログラムの中で一つの位置を占めるものに昼食の時間がある。ここでも幼児たちはさまざまな生活習慣を学習するわけである。それ以外にゲーム・リズム遊び・歌などの活動や、衣服をぬぎきしたり、戸外に出かけるといった時間を考え合わせて、幼稚園の一日は計画されるべきであるとして、一日の計画が三つほど例示してある。それによれば、二つは3〜4時間保育の例で、同一スケジュールを午前と午後を用いるよう時間の区分がなされている。今一つは六時間半の終日保育の案であるが、そのどれにも午前・午後一回ずつの間の時間が記入されていること、および排泄・手を洗うなどといった行為が明記されている点、いかにも生活中心の計画を感じさせて興味深く思われる。

なおその後に、はじめて入園した幼児たちのための注意が付け加えられている。以上のように順を追って幼稚園という教育機関の性格を述べているのであるが、各章の終りには、各々討議問題として質問が提出されている。例えば第一章の終りには五つの問いが付されていて、その第一は次のようなものである。「ベストロッテによって創められた学校は私どもからみれば保守的であるが彼の時代では非常に『進歩的』であった。このことばが教育に適用される時には、どのような意味をもつか。そして、教育の場における保守的とか進歩的とかを決定するものは何か。」

この問いには著者によれば、正しい答えとか誤答とかは存在せず、読者たちに考えさせ、この書物の実際的な応用価値を高めるためのものとされている。読者各位の教育観と児童理解の程度に応じて各々の答えがなされるのであろう。

（未完）  
（本田 和子）